

答えのない課題に対して自分で考え、行動する力を身につけてほしい。



新井 教 諭

NORIYUKI ARAI

赴任地



赴任地での職種(活動分野)
小学校教育

京都府京都市
京都教育大学附属高等学校 地理歴史科教諭

大学院を修了後、地理歴史科教諭として京都で就職。教育現場においてグローバル人材の育成が叫ばれる中、そのためにはまず教員がグローバル人材にならないといけないと考え、現職教員特別派遣制度を利用してJICA海外協力隊に参加する。サモアでの2年の活動後、赴任前と同じ京都教育大学附属高等学校に復職。

自分のために、生徒のために、立ち止まらず考え続けていきたい。

府内で唯一の国立高校である「京都教育大学附属高等学校」。教員養成系大学の附属校として、大学との共同研究を反映させた授業など、有効な教育方法をいち早く採り入れている。

同校で地理・歴史科教諭として、3年生の担任を受け持つ新井さん。JICA海外協力隊の経験は、オセアニア・ポリネシア地域を扱うときや、世界の貧困やSDGsの授業の際に活かされている。また、JICA海外協力隊が縁で知り合った人々を外部講師として招き、国際理解や

人権学習の特別授業を企画。教員以外の大人と接する機会を設けることで生徒の視野を広げ、将来の選択肢を増やしてほしいと考えている。

新井さんは、現代社会では答えのない課題に向き合える人材育成が求められており、教員数の確保や日本の小・中・高等教育モデルの実態が理想に追いついていないと言う。「現状の教育界に問題は多いですが、諦めないで考え続け、行動することが大事です」。今日も模索しながら、新井さんは教壇に立つ。

自分から輪に入ることで、お客様から、信頼される先生へ。

赴任先はサモアの首都アピアから40km離れたレウルモエガという田舎村。そこにある全校生徒およそ100人の小学校で新井さんは算数と理科を教える予定だった。しかし、着任当初はサモア語があまり話せず、完全にお客様扱い。このままではいけないと、自分ができることを積極的に提案。一つずつ誠実に行っていったところ、徐々に周囲の評価が高まっていった。現地の人の輪に自ら飛び込み交流することでサモア語も上達し、任される授業もどんどん増えていく。特に子どもたち一人ひとりと真剣に向き合う姿勢は、「勉強が嫌いな子だったのに計算ができるようになった」「学校に楽しそうに行くようになった」と保護者からの信頼につながった。



理科の授業用の板書(小4ライフサイクル)



ラグビーの指導も行った



サモア国レウルモエガ村で算数の授業(小3掛け算)

先生として以上に、村人として認められた。

現地の人と距離を縮めるきっかけとなったのが、新井さんが学生時代に打ち込んでいたラグビー。サモアはラグビーが盛んな国で、楕円のボールと一緒に追いかけることで自然と人間関係ができていった。子どもたちにラグビーを教えることはもちろん、小学校の全国大会に付き添ったり、ルールに詳しいからと審判として重宝され、地区大会で主審を務めたことも。放課後や休日子どもたちと一緒に過ごした。

帰国の際には、新井さんが行く先々で送別パーティーが開かれた。赴任校では、学年ごとに子どもたちが出し物を披露してくれたほか、保護者や地域の人々も大勢駆けつけて別れを惜しんだ。新井さんが教員として人間として、サモアの人々に愛されていた証拠だ。



いつでも、どこでも子どもに必要なことは同じ。

サモアでの2年間で振り返って、「国が違っても、年齢が違っても、教科が違っても、教師として大事なものは同じだとわかったのは大きな財産」と語る新井さん。それは、目の前の子どもをリスペクトして向き合うこと、子どもの成長のためにどうすれば良くなるのかを常に考えることだという。現在、高校で担任するクラスの生徒は約40名。授業準備や部活指導で忙しい毎日、一人に割けるコミュニケーションの時間はどうしても限られてしまう。しかし、自分の受け持つ生徒一人ひとりとしっかり向き合い、彼らがどのようなことを考えて、感じているのかを聞き逃さないように意識している。



部員2名の硬式野球部の顧問を務める



教師が与えるのは、きっかけや選択肢の幅。

個人一人の力で、社会の課題を解決するのは無理かもしれない。しかし、教師という仕事をしている自分は、生徒たちにきっかけを与えることができる。海外の教育現場での経験や実体験を通して知った途上国の問題を伝え、世界に関心を向けよう、困った人を助けようというメッセージを発信することで、受け取った生徒たちが社会にある多様な問題に気づき、自分で考え、選び、行動していつくれるかもしれない。

「自分はこれからも教員としての人生を歩みますが、生徒たちの未来は様々に広がっていきます。一人ひとりが強みを活かして社会で活躍できるように後押しすることで、より良い世界につながっていくと思います」。

上司に聞!



京都教育大学附属高等学校 副校長(理科) 岡本 幹さん

常に生徒のことを第一に考え、指導にあたられている新井さん。海外での自らの経験を還元した授業は、きっと生徒たちにとっても得るところが多いでしょう。また、JICA海外協力隊によって広がった人の輪を活かし、様々な学びの機会も提供されています。本校という枠を飛び越え、広く有意義な教育活動に取り組まれることを期待しています。

JICA海外協力隊を目指すみなさんへ 挑戦という楽しさを実感できるチャンスです。

JICA海外協力隊の2年間で人間的に成長できたとし、考え方も大きく変わりました。見知らぬ環境に身を投じることに大きな困難が伴います。しかし、同時に、挑戦することの楽しさや日本では経験できない達成感を得ることができました。今後も常に様々なことに挑戦していきたいです。